

母の心

濱田 心希

春休みの事だった。家の近くの駅まで、母と二人で歩いていった。信号待ちをしていると、しらがが生えていて足が不自由なのかつえをついて重たそうに物をもったおばあさんが、先に信号待ちをしていた。青になったのでわたっていると、母は横だんほ道をひき返し、おばあさんの元へかけよった。

「しん号が点めつしているので、お手伝いしましょうか。」

と、声をかけた。びっくりした。母が後ろを見ていたなんて。おばあさんが言った。

「いいのよ。」

母は、

「いいんです、さあ、お持ちするので行きましょう。」

と、おおうような温かい手でやさしく引っぱって、ぎりぎり信号をわたった。

「ありがとうね。」

と、お礼の言葉を言われた。

「お役に立ててよかったです。」

と、母は言いおばあさんはまたゆっくり歩いて行った。母に聞いた。

「なんでさつきはおばあさんがこまっているのに気が付いたの？」

「なんでもかかって？それは、ママには後ろにも目がついているからよ。」

と、わらいながら言った。その言葉にドキッとしてしまった。その後、母のような人になりたいと思った。わたしの母は、病気の人の家をまわる「ざいたくかんご」という仕事をしている。なので、仕事に行く時は、

「助けに行ってくるね。」

と、言い出かける。母がわたしに話してくれた事がある。

「お母さんの仕事は、家の人や本人が大丈夫と言っても、表じょうや声のトーンなど色いろ見てはんだんするの。」

と。本当に目がついていたらこわいなと思うが、それくらい見ないとだめなのかなと思つた。お母さん、人のためにせいっぱいつくせることを教えてくれてありがとう。わたしの名前の由来は心やさしく自らこころざしを持ち人のために力をつくせる希望をあたえられる人に育つようにつけられた。だから、お母さんのようになるため、がんばります。さい近は、反発ばかりするけど、お母さんの子どもに生まれて来てよかつたよ。こんなわたしに希望があふれる名前をつけてくれて本当にありがとう。